

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 16 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320133

研究課題名(和文)北東アジアにおける帝国のプレゼンスと地域社会

研究課題名(英文)Presence of Empire and local society in Northeast Asia

## 研究代表者

白木沢 旭児 (Shirakizawa, Asahiko)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：10206287

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,100,000円

研究成果の概要(和文)：かつて日本帝国の支配下にあった満洲、朝鮮、樺太、台湾を対象として、ロシア・清(中国)・日本という複数の帝国の影響力を視野に入れつつ、それぞれの地域社会レベルの歴史的変容を研究してきた。成果としては、満洲・朝鮮における地方都市の発達史、満洲国軍の解明、満洲・朝鮮・台湾における産業発達史、樺太・満洲における複数の帝国の重層的な支配の解明など新たな知見を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：We study the areas that were ever under the control of Japanese empire. That is Manchuria, Korea, Karafuto, Taiwan. We tried for considering the influence of plural empires, namely Russia, China, Japan in Northeast Asia and we studied the transformation process in each community. The results of research are as follows. First, we elucidated the history of the city in Manchuria and Korea. Second, we elucidated the history of the Manchurian national military. Third, we elucidated an industrial history in Manchuria and Korea and Taiwan. Fourth, we clarified the multilayer-like rule of the plural empires in Northeast Asia .

研究分野：日本史

キーワード：帝国 満洲 朝鮮 樺太 台湾

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 帝国主義論から帝国史へ

近年の歴史学では、帝国の存在に注目し、帝国の生成・発展・衰退過程および帝国の中核にいる民衆と帝国に支配される側の民衆の動向に関する研究が大きく進展している。とりわけ日本史では、従来の日本史の対象範囲が戦後の日本国の領域に該当する日本列島(北海道、本州、四国、九州)に限定されていたことが問題視され、それぞれの時代における日本人の活動領域に目を向け、さまざまな民族、民衆との接触・交流を研究対象とすることが定着しつつある。

また、最近の研究では、帝国主義論を理論的前提とはせず、「帝国」、「帝国日本」などの用語が用いられるようになってきている。従来の帝国主義論的視角による植民地研究においては、支配者(日本帝国主義)あるいは被支配者(植民地民衆)が抽象的に設定され、たとえば大陸からの引揚者の体験談、回想とまったく交わらない、別個の歴史像が描かれてきた、という傾向があった。しかし、最近の帝国研究においては引揚者の体験談に相応の注意が払われ、当時の日本人ひとりひとりが植民地においてどのような体験をしたのか、どのような認識をもったのか、あるいは植民地住民の具体的な誰かが日本人のふるまいをどのように見ていたのか、植民地住民と日本人との関わりはどのようなものであったのか、などについて具体的な事実を掘り起こすことに力が注がれている。

### (2) 体験・記憶の再発見

このような、新しい視角を代表する研究として、蘭信三編著『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』(不二出版、2008年)をあげることができる。同書は、戦前日本人が行き来した地域をすべて分析対象として、引揚者、移民経験者などからの聞き取りや体験談・回想録を効果的に用いて本国と帝国内各地域との具体的な人間の交流を明らかにしている。また、本研究の分担者である寺林伸明が研究代表者を務めた基盤研究(B)海外学術調査「日中戦争下の中国東北農民と日本人「開拓団」との関係史、および残留帰国者の研究」(平成18年度~21年度)においては、中国東北地方農村における農民からの聞き取り調査、北海道における残留帰国者からの聞き取り調査を実行し、北海道の民衆と中国東北地方の民衆との戦時・戦後の具体的な交流の一端を明らかにしている(寺林伸明・劉含発・白木沢旭児編『日中両国から見た「満洲開拓」- 体験・記憶・証言 -』御茶の水書房、2014年)。本科研は、この問題意識を継承しつつ調査・研究範囲を拡大したものである。

## 2. 研究の目的

### (1) 帝国主義論と帝国史の架橋

ところで、従来の帝国主義論的視角による

研究と近年の帝国史的視角による研究は、相互に対立するものではなく、従来の研究が明らかにしてきた日本帝国による支配、現地住民の体験した被害という事実は消えることはないであろう。ただし、その問題を抽象的な権力と民衆という枠組みで説明してしまうのではなく、ある日本人とある中国人(朝鮮人、先住民族)との接触、交流の積み重ねとして具体的に事実を掘り起こし、明らかにすることが必要ではないかと考えるのである。

### (2) 歴史としての北東アジア

冷戦の終焉により日本、ロシア、中国、韓国の政治経済面での結びつきは強まってきており、現状分析の政治学・経済学では北東アジアというタームを頻繁に用いるようになってきている。歴史学においても、これらの地域を総称して北東アジアとして捉えることは有効ではないだろうか。ここでいう北東アジアの範囲は、中国、台湾、朝鮮半島、極東ロシア、樺太、日本列島であり、これらの地域は19世紀~20世紀には清、ロシア、日本という帝国の勢力範囲にあった。現状分析の研究においては対等・平等の国際関係を前提として北東アジアが語られるが、歴史的に見るならば、北東アジアは中国、ロシア、日本という3つの帝国の摩擦・衝突が絶えない地域だったのである。北東アジアの近代史について、上述の帝国とそのもとにおける民衆(日本人、ロシア人、中国人、朝鮮人、先住民族)との接触、交流史という視点で改めて歴史を問い直すことが必要ではないだろうか。このような含意により「北東アジアにおける帝国のプレゼンスと地域社会」を企画するに至った。

## 3. 研究の方法

### (1) 資料調査

中国東北地方、韓国、サハリンにおける戦前日本語文献・資料を調査し帝国の時代における地域社会の実態を解明する。また、中国、韓国、ロシアの研究機関・資料所蔵機関および研究者・アーキビストなどとの研究交流を継続的に行い、日中韓口における近代史研究の成果を相互に学ぶとともに日本所在の資料についても積極的に紹介・普及に努める。また、研究方法の一つとして、特定の地域での聞き取り調査も積極的に行う。これらの研究活動を通して「帝国の時代」における北東アジア地域の人々の経験を具体的に検証する。

結果として本科研の経費を用いて資料調査に行った主な機関は以下の通りである。

(国外)木浦近代歴史館、国家記録院、ソウル大学校中央図書館、国史編纂委員会、国立中央博物館、国立中央図書館、延世大学校中央図書館、ソウル市立図書館(以上韓国)吉林省社会科学院満鉄資料館、遼寧大学歴史学部、北京大学図書館、吉林省社会科学院東北

淪陥史研究室、吉林省社会科学院満鉄資料館、大連市図書館、大連市档案馆、吉林市図書館（以上中国）国立高雄大学、国立台中図書館、中央研究院図書館、国立台湾大学図書館（以上台湾）

（国内）国立公文書館つくば分館、東京大学経済学部図書室、同東洋文化研究所、外務省外交資料館、三井文庫、学習院大学東洋文化研究所、東洋文庫、東京経済大学、一橋大学附属図書館、国立国会図書館、京都大学経済学部図書室、同農学部図書室、神戸市立中央図書館、広島大学文書館。

（聞き取り調査の訪問先）函館市、伊達市、旭川市、恵庭市、東京都、埼玉県。

## （2）学術交流

本研究の研究組織は大学に所属する日本近現代史、朝鮮近代史を専門とする研究者と博物館に所属する日本近現代史、日本近世史、文化人類学を専門とする研究者から構成されている。韓国語、中国語に堪能なメンバーもあり、また従前の寺林科研や北海道開拓記念館の交流事業により中国東北地方、サハリンの博物館、研究機関および研究者との交流実績を積んできており、これに韓国をフィールドとして長年交流実績を積んできた辻弘範を加えて北東アジアという視野で研究交流を発展させることが可能となっている。

平成 23 年度には杜穎氏（黒竜江省社会科学院）、平成 24～26 年度には張曉紅氏（大連理工大学）を研究協力者として継続的な調査・情報交換を行った。

## 4. 研究成果

### （1）満洲・朝鮮における地方都市の発達史

营口 満鉄系企業で長年役員を務めた今井榮量が残した文書が、北海道大学大学院文学研究科日本史学講座に寄贈された。この文書の資料整理・目録作成を行った結果、総点数 147 点、1904 年～1936 年にかけてのものであることが明らかとなった。特に今井が深く関わった営口水道電気株式会社の分析により、役員構成における中国人資産家の役割、満鉄からの出向者と土着日本人実業家との役割の相違などが明らかにされた。また、営口水道電気株式会社は、満鉄系企業とみなされていたが、厳密には「日中合弁企業」としての性格を有するものであった。

安東 安東は、日露戦争時の日本軍政に端を発し、都市建設が始められた。日本軍は現地で広大な土地を買収し日本の大阪・札幌をまねた街路計画を策定した。1906 年に軍政が終了すると、この土地は「日本人居留民団」管理となったが、条約上の正当性を欠いていたことから 1923 年にすべて「満鉄附属地」に編入された。その面積は現代の千代田区や文京区を上回るほどである。『安東商工案内（康徳六年版）』、『満洲国工場名簿（康徳八年末現在）』により商人および工場データベースを作成した。商人（1938 年）1718 軒、

工場（1941 年）673 軒であり日本人、中国人が基本的に附属地と旧市街（「支那街」）に住み分けしつつも、双方の出入りも見られた。

興南 日本窒素（以下日窒）の巨大な化学コンビナートが形成された、朝鮮唯一の工業都市・興南の日本窒素関係者の体験記を基本資料としながら、コンビナートおよび都市の形成過程から戦後の留用、脱出、引揚過程までを詳細に明らかにすることができた。終戦直後には日本人は工場から追放され、宿舍も朝鮮人宿舍と日本人宿舍の入れ替えが行われた。しかし、技術者は指導のために留まり、工員も人夫の名目で工場に復帰することができた。また、朝鮮人工員のなかから朝鮮人技術者を養成するために学校が設けられ、日本人技師が教師陣を構成し日本語による教育を行った。

### （2）満洲国軍の解明

満洲国期には軍官学校が設立され新たに多数の軍校出身者が生みだされた。そのなかには朝鮮系学生も多く、彼等は戦後、韓国の軍人として職を得ることになる。朝鮮系満洲軍校出身者は、韓国軍においても重要な地歩を占め、朴正熙クーデターでも重要な役割を果たした。また、中国系満洲軍校出身者は国民党軍あるいは警察官などに就職していった。

### （3）満洲・台湾における産業発達史

#### 満洲・奉天における中小工業

満洲国産業部大臣官房資料科編『満洲国工場名簿』康徳 5 年版～7 年版および満洲中央銀行編『満洲国会社名簿』（資本金 20 万円未満）（資本金 20 万円以上）1943 年を駆使して当該期奉天における機械器具工業の実態を統計的に明らかにした。それによると、この時期に機械器具工場は増加傾向を示しており、職工数 100 名以上の大規模工場は、親工場との下請関係や土木工事による民生機械部品市場拡大に迅速に対応して規模拡大に成功していた。これに対して職工数 50 人未満の小規模工場では中国人資本が多く、機械部分品製造・修理や車輛部分品生産などがあり、大工場との下請関係も展開していた。また、この時期には日本中小工業の「満洲移駐」が盛んに奨励され、商工省が方針を樹立するにいたる。しかし、日本側の戦時経済で不要となった中小工業を満洲に送る、という案に対して満洲国側は重要産業の強化を目的としており、ギャップは大きかった。方針が転換した後、満洲における生活必需品部門の移駐に重点が置かれることになった。

#### 台湾における漆

漆器としても軍需品としても重要な塗料である漆は、国産化ができず、外国からの輸入に依存していたが、台湾総督府の技師たちにより、仏領インドシナ産「安南漆」を移植する試みが行われた。通説よりも 3 年ほど早い 1918 年に新竹州北埔林業試験地にて試験

栽培が行われたことが明らかとなった。その後も北海道帝国大学出身の技師により台湾での漆栽培が続けられ 1930 年代には本格的な国産下の時代を迎えた。また、齋藤漆店などの商人も漆貿易から台湾における漆栽培に手を伸ばし、1940 年には台湾殖漆株式会社が設立された。ただし、漆は台湾内供給にとどまり、対日供給はできなかったようである。

本科研の研究成果を刊行する準備を進めている。収録を予定している論文(章)は以下の通りである。

白木沢 旭児「北東アジアにおける帝国のプレゼンスと地域社会」に関する覚書

秋山淳子「日中合弁企業：営口水道電気株式会社の経営」

東俊佑「北蝦夷地における大野藩のプレゼンスとアイヌ支配 - ウシヨロ場所経営帳簿《北蝦夷地用》について - 」

池田 貴夫「大豆から落花生へ - 節分文化の地域性 - 」

及川琢英「満洲国崩壊後の満洲軍校出身者の動向」

胡慧君「日中関係を改善するための模索 - 胡適の日記を中心に - 」

白木沢 旭児「2つの帝国 - 植民都市・安東の地域経済史 - 」

崔誠姫「植民地期朝鮮における地域社会と中等教育 - 1920~30年代平壤地域を中心に - 」

張曉紅「1938-1943年の奉天市における中小機械器具工業の変容」

辻弘範「旧植民地在住日本人の記憶と記録」

寺林 伸明「『東北日本移民档案(黒竜江巻)』に見る日本移民と現地住民」

内藤 隆夫「朝鮮北部在住日本人の戦時と戦後 - 日本窒素による工業都市社会の建設と変容、そこからの脱出 - 」

朴仁哲「『満洲』移民のライフヒストリー(生活史)を読み解く - 対話的構築主義アプローチを用いて - 」

湯山英子「近代アジアと漆貿易 - 日本・中国・仏領インドシナ・台湾・朝鮮における地域間分業の展開過程 - 」

劉含発「二十一世紀以降の満洲移民に関する研究動向」

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### 〔雑誌論文〕(計 10 件)

白木沢 旭児、戦時期華北における農業問題、農業史研究、査読有、第 48 号、2014、29 - 39

内藤 隆夫、明治期石油精製業者の製造・販売活動と原油調達 石崎製油所の事例、東京経大会誌、査読無、第 279 号、2013、259 - 287

東 俊佑、近世蝦夷地交易品ノート(1) - 17~18 世紀アイヌ生産品を中心に - 、北方地域の人と環境の関係史 2010-12

年度調査報告、査読無、2013、97 - 184  
東 俊佑・白石 英才、ニヴフの交易活動に係る聴き取りと物質文化資料の調査について、北海道開拓記念館研究紀要、査読無、第 41 号、2013、107 - 146

白木沢 旭児、日中戦争期における長期建設、日本歴史、査読無、第 774 号、2012、76 - 93

池田 貴夫、日本領樺太の民俗・緒論、日本民俗学、査読有、第 272 号、2012、72 - 89

池田 貴夫、サハリン残留朝鮮人の生活史 - 境遇としての悲劇、語られる自画像 - 、生活学論叢、査読有、第 20 号、2012、31 - 44

内藤 隆夫、北海道近代史研究のための覚書、『経済学研究』(北海道大学)、査読無、第 61 巻第 3 号、2011、21 - 35

内藤 隆夫、地域経済の創出 - 明治初期北海道石炭産業史の再検討 - 、平成二十二年度助成研究論文集((財)北海道開発協会開発調査総合研究所編)、査読無、2011、225 - 249

内藤 隆夫、北海道近代史研究の課題、開発こうほう、査読無、第 580 号、2011、28 - 32

### 〔学会発表〕(計 2 件)

白木沢 旭児、日中戦争下華北における農業問題 - 日本語資料による研究 - 、第 13 回日中韓農業史国際大会、2015 年 5 月 23 日、南京(中国)

内藤 隆夫、明治 - 大正中期日本石油産業における第三のタイプ 中野家と個人精製業者の事業活動、社会経済史学会第 83 回全国大会、2014 年 5 月 24 日、同志社大学(京都府京都市)

### 〔図書〕(計 7 件)

白木沢 旭児、明石書店、東北地方「開発」の系譜 - 近代の産業振興政策から東日本大震災まで - (松本武祝編著) 2015、161 - 176

寺林 伸明・劉 含発・白木沢 旭児編、御茶の水書房、日中両国から見た「満洲開拓」 - 体験・記憶・証言 - 、2014、614  
内藤 隆夫、名古屋大学出版会、日本経済の歴史(中西聡編) 2013、129 - 180  
池田 貴夫、新曜社、叢書戦争が生み出す社会 引揚者の戦後(島村恭則編) 2013、213 - 235

池田 貴夫、北海道新聞社、なにこれ!? 北海道学、2013、224

白木沢 旭児、京都大学学術出版会、日本帝国圏の農林資源開発 「資源化」と総力戦体制( ) (野田公夫編著) 2013、179 - 211

白木沢 旭児、北海道大学出版会、日露戦争とサハリン島(原暉之編著) 2011、367 - 395

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

白木沢 旭兎 (SHIRAKIZAWA Asahiko)  
北海道大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：10206287

### (2) 研究分担者

内藤 隆夫 (NAUTO Takao)  
東京経済大学・経済学部・教授  
研究者番号：60315744

寺林 伸明 (TERABAYASHI Nobuaki)  
北海道博物館・学芸部・学芸員  
研究者番号：80172104

辻 弘範 (TUJI Hironori)  
北海学園大学・経済学部・准教授  
研究者番号：20348494

### (3) 連携研究者

池田 貴夫 (IKEDA Takao)  
北海道博物館・学芸部・学芸員  
研究者番号：30300841

東俊佑 (AZUMA Syunsuke)  
北海道博物館・学芸部・学芸員  
研究者番号：30370224

### (4) 研究協力者

秋山 淳子 (AKIYAMA Junko)  
及川 琢英 (OIKAWA Takuei)  
胡 慧君 (HU Huijun)  
高松 夏央 (TAKAMATSU Nao)  
竹野 学 (TAKENO Manabu)  
崔 誠姫 (CHOI Seonghee)  
張 曉紅 (ZHANG Xiaohong)  
朴 仁哲 (PIAO Renzhe)  
湯山 英子 (YUYAMA Eiko)  
劉含癸 (LIU Hanfa)